

出川イングリッシュと海外修学旅行での英語タスク

原田 淳

はじめに

定期試験終了直後の学年集会で、筆者は、ハワイ修学旅行を控えて興奮気味の高校2年生約200人を前にこんな話をした。「『世界の果てまでイッテQ!』(日本テレビ系、以下「イッテQ」)を見ているかな。『出川はじめてのおつかい』を知っている? 見ていない人は出発前に放送を見ておくのが宿題です。ハワイでどう英語を使っていくか、非常に参考になります。」

本稿ではお笑いタレント出川哲朗氏がテレビで繰り広げる英会話術を論じ、それを踏まえて行った海外研修旅行での英語を使用させるタスクについて実践報告をする。

出川イングリッシュ

「イッテQ」は、毎週放送されているバラエティ番組で、その中で出川氏が型破りな英語を駆使しながら海外で奮闘する様子を伝える「出川はじめてのおつかい」というコーナーが、不定期に放映されている。ニューヨークやロンドンなどで収録され、出川氏に番組から与えられるミッションは、自由の女神、大英博物館などの観光名所に地図やガイドブックなしで、道行く人に英語で尋ねながらたどり着くというもので、望遠カメラや隠しマイクでとらえられた出川氏の言動が、テレビを通じてお茶の間に流れる仕組みになっている。

テレビ番組のことなのである程度の「やらせ」も含まれていようが、文法語法を無視した出川氏の英語は笑いを誘うと同時に、その伝達能力の高さに感心させられる。方角を尋ねるときは、where という語すら使わず、四方を指しながら「レフト・ライト・センター・バック?」という具合だが、それでもしっかり通じている。自由の女神は「フリー・ウーマン」、アヒルは「ガーガー・バード」、無論これでは通じないし、話しかけられた通行人も当惑する。

しかし通じなければ作戦を変更し、別の表現で攻めてみる。自由の女神は「ビッグ・グリーン・ドール・ニューヨーク・ナンバーワン・スポット」、大英博物館は「イングランド・ヒストリー・ホール」、英国国会議事堂は「イングリッシュ・プレジデント・トーク・ハウス」と表現することで、相手のネイティブ・スピーカーから the Statue of Liberty, the British Museum, Westminster という正しい名称を引き出す。こうして聞き出した英語の名称を何度もつぶやきながら、バスや地下鉄を乗り継いで、見事目的地にたどり着くまでの姿が放送される。ちなみに、The Statue of Liberty は「スタジオ・リバティ」または「スタジオ・リバー」と聞き間違えていたが、道行く人に「スタジオ・リバティ?」と繰り返し尋ねながら、奇跡的に目的地に達している。

こうした出川氏の勢い任せの英語コミュニケーションには批判もあるだろう。とりわけ、相手に発言の繰り返しを求めるのに、“Come on. Say, say, say, say!” と畳みかけるのは、あまりにも失礼であると言える。しかし、言語習得の観点からは注目すべき点が多い。上記のように知らない語を、知っている語で置き換え表現する方法は、strategic competence (方略的能力)と呼ばれ、コミュニケーション能力の重要な要素である(Canale & Swain, 1980)。また対話によって必要な表現を相手から引き出す術は、negotiation of meaning (意味交渉)と呼ばれ、言語習得を促す重要な働きがあるとされる(Loewen, 2014)。そして覚えた語を何度もつぶやく行為は sub-vocal rehearsal (内語反復)といい、ワーキングメモリの音韻ループを活性化し長期記憶にとどめる働きがあるとされ、英語学習で音読が推奨される根拠のひとつにもなっている(門田, 2007)。このように、不器用にみえるこのような出川氏の英会話から、コミュニケーションの知恵を学んでもらいたいと考え、「イッテQ」を単なるお笑い番組でなく、

教育番組として生徒たちに推奨したのである。

ハワイ修学旅行

筆者の勤務校では、高校2年時に実施する修学旅行の行き先を3年前よりハワイにしている。修学旅行という位置づけから、ハワイ島での火山や天体観測、熱帯雨林における生態系の学習といった自然教育の企画を充実させている。同時にハワイ大学を訪問し学生たちに英会話の相手になってもらうなど、異文化交流の機会も用意されている。そして最終日はオアフ島に渡り、ワイキキで班別自由行動の時間で締めくくる。このように中身の濃い修学旅行ではあるが、最終日が買い物だけに終始してしまうことには若干の物足りなさを感じていた。そこで考えたのが、「イッテQ」同様に、生徒たちに以下のようなミッションを与えてみることである。

- ① GNC というサプリの専門店を探せ。
- ② Royal Hawaiian のコーヒー専門店でお勧めのコーヒーを紹介してもらえ。
- ③ 足もとの健康を促進するサンダルを探せ。
- ④ 写真と同じバッグを探せ。(写真は Under Armor 製のバックパック)
- ⑤ 店員さんと交渉しておみやげを定価より安く買え。
- ⑥ ブラジル原産の果物をシリアルの上トッピングとして提供する店を探せ。
- ⑦ ハワイ王朝時代の女王の別荘を改装したホテルを探せ。
- ⑧ エビやカニを手づかみでとって食べさせてくれるレストランを探せ。
- ⑨ ダイバーが入る大水槽があるレストランを探せ。
- ⑩ 自分で考えた英語の質問で20人以上に街頭インタビューをして、結果を報告せよ。

※“Excuse me. Could you answer a quick survey question?” と話しかけるとよい。

生徒が5から6人の班になってホテルからワイキキの街に繰り出す直前に、ミッションの用紙を与えた。あくまでも生徒の自主見学の時間であることを尊重し、タスクの無理強いは避け、「できるだけやってきてごらん」と生徒たちを送り出した。

具体的な店名がある①などは、Where is ～で事足りるが、②～⑤になると店を探し、そこで店員さ

んとやり取りが必要となる。⑥ではアサイボールという食品名をあえて示さず、「ブラジル原産の果物」とすることで、その正体を突き止めるためのインタラクティブが期待できる。また⑦から⑨の場所を突き止めるには、その特徴を相手に英語で説明するという描写力が求められ、語彙が不足した生徒たちにとっては、辞書や身振りを使って伝える、まさに方略的能力が試される場面であろう。⑩のミッションは、異国の地で知らない人に話しかけるという精神的ハードルの高いものであるが、「イッテQ」に刺激を受けた生徒たちの勇気に期待した。ハワイの開放的な人々と触れ合うことで、単なる質疑応答以上の会話に発展すれば、英語を話す楽しさも体験できるであろう。

なお、このミッション作成に当たっては task based language teaching(タスクに基づく語学指導法：以下 TBLT)を意識した。Ellis & Shintani (2014)は TBLT の要件として、1)フォーカスの中心が文法形式でなく意味伝達に当たること、2)参加者の持っている情報にギャップがあり、伝達の必要が生じること、3)学習者が自分の持っている知識でタスクを遂行すること、4)タスクの成果が明確であること、の4点を挙げている。「イッテQ」を見せることで生徒たちには文法や発音を気にせず度胸でコミュニケーションをとることを意識させ、ワイキキに関する知識のない生徒が現地の人から情報を仕入れ、自分たちの持っている英語知識だけでタスクを遂行し、ミッションを一つ一つ達成し報告するという活動で、TBLT の4要件を満たしていると考えられる。(※註)唯一の例外は、ミッション⑩の街頭インタビューで、話しかけるときの表現を提示したことである。その理由は、街中は教室内と違い、生徒たちは言語の「学習者」ではなく「使用者」とみなされるので、たとえタスクの原則から外れても、相手に不快な思いをさせないように、あらかじめ丁寧表現を教えておく必要性を感じたからである。

結果

約4時間にわたる生徒の自主行動なので、彼らがどのようにコミュニケーションをとりタスクをこなしていったのかという観察データはなく、すべては生徒の報告をもとにしている。また彼らが英語のコ

コミュニケーションをとらず、スマホ検索などの安易な方法に頼った可能性も否定できないが、出川流コミュニケーションを学んだ生徒たちが、今回のミッションの意義をきちんと理解して、正当にタスクに臨んだということを信じて報告する。

学年全体で 36 班、ホテルに戻ってきたほとんどが、最低 1 つのミッションを達成した。一番達成率の高いものは⑤であり、中には半額近くまで値切ったと胸を張る生徒もいた。実利性が動機づけとなったようである。また場所を尋ねるだけの①の達成率も高い。ここまでできれば自力での海外旅行も不可能でないだろう。

36 班中、とりわけミッションに熱心に取り組んだ班が 2 つあった。①から⑩のミッション全てに挑み、うち 8 つを達成した A 班と、9 つを達成した B 班である。⑩の街頭インタビューにも取り組み、A 班は「好きな日本食」、B 班は「好きなすしのネタ」を質問し、それぞれ 20 人以上から回答を集めてきた。帰国後に表彰して彼らの活躍をねぎらった。

この 2 班に依頼して、どのような英語やジェスチャーを使ったかをできるだけ正確に再現してもらった。A 班は時には和英辞典を使い、関係詞なども活用しながら、形式を意識した正しい英文を作ろうと試みていたようである。

- ・ Do you know the shop which name is GNC?
- ・ In this shop, are there any sandals which improve our health of feet?
- ・ Do you know the shop which we can decorate cereal with some fruits?
- ・ Do you know the hotel which renovated cottage of queen in Hawaiian dynasty? (renovate と dynasty の 2 語を和英辞典で調べ)
- ・ Do you know the restaurant which let us eat with grabbing shrimps and crabs?
- ・ Do you know the restaurant which has a large pool divers go into?

一方 B 班は、彼ら自身が「単語を並べた」「ジェスチャーで通じた」と証言しているように、形式よりも意味伝達を重視したアプローチを試みている。

- ・ We are looking for good for health sandal, foot massage sandal.

- ・ We are looking for cereal with Brazilian fruit, sweets!
- ・ We can hand catch crab and shrimp (手ではさみを作るしぐさ) and eat.
- ・ Restaurant has big pool, can diving (腕を広げて大きな水槽を表し、手で泳ぐまねをしてもぐるしぐさ) like an aquarium restaurant.

対照的な取り組みをした両班であるが、ミッション後の感想はともに肯定的である。

「積極的に英語を話そうという姿勢が班全体で up した」(A 班)。

「楽しく英語を使えました」(B 班)。

一方、買い物に忙しかったのか、ミッション用紙を提出しない班も少なからずあった。今回のミッションは出発直前に考案したもので、実施した筆者としてもその位置づけを明確にできなかった。生徒の中にはかなり前からワイキキでの行動を綿密に計画していた班もあり、彼らの計画を潰してまでタスクを強要することははばかられた。ただしミッションを達成した A、B 両班の満足度を見ると、もっと生徒全体に徹底させてもよかったのではないかという反省が残った。

考察

今回のワイキキミッションが、生徒たちの英語学習にどのような効果をもたらすのだろうか。タスク遂行時のインタラクションのデータが乏しい上、運用能力の伸びを計測するテストも実施していないので、どのような気づきが生じ、言語習得にどのような影響を与えたのかを論じることはできない。しかし、おみやげの値引き交渉など、普段の一斉授業でほとんど達成できなかった意味交渉に多くの生徒が従事してきたことは、一つの成果であるといえる。グループ行動であるから、班の一人が英語を使い、他のメンバーはそれを見ていただけという可能性もあるが、仲間のインタラクションを見ているという行為にも、一定の学習効果は期待できる(和泉, 2009)。

帰国後の生徒の作文からは、英語を使った体験から大きな刺激を受けたことが伝わってくる。「下手な英語でも通じた」という感想を聞かせてくれた生

徒もいた。ワイキキミッションだけでなく、ハワイ大学の学生との交流、ガイドさんの英語の説明も刺激となったようで、生徒たちの作文の中には「中学英語の大切さがわかった」「英語を使う自信がついた」という記述がみられ、学習動機により効果をもたらしたことが見て取れる。

しかし、優秀な成績を残した A、B の両班の英語も文法上の誤りが散見される。「下手な英語でも通じた」という体験を、今後の学習にどう生かすかに真価が問われている。Schmidt (1983)の研究に登場する Wes という名の日本人画家は、成人してからハワイに渡り、ブロークンな英語ではあるが、多くの仲間と社交的な生活を送っている立派な国際人である。しかしことばが通じることに満足し、英語の上達がほぼ停止してしまっている、いわゆる習得の不完全性が指摘されている。「イッテ Q」を題材に勇気を持って英語を話すことを奨励し、その面では一定の成果を出せたが、英語教師としては、生徒たちがそこにとどまらず、さらに言語習得の道を進んでいくことを期待したい。TBLT の意義は、コミュニケーションをとることで自分の言語知識の不足や正しい言語形式に気づくことにある。とすれば、「下手な英語でも通じた」という発見に喜びを感じると同時に、「もっと上手に話したい」という意欲も持ってもらいたい。自分たちがどのような英語を使ったのか振り返り学習させる活動を、生徒の記憶が鮮明なうちに行うことが急務である。とりわけ関係詞については、A、B 両班の産出した英語を基に、再度学習することが効果的であろう。

筆者はこれまで TBLT に関心を持っていたものの、普段の授業で実践できないことに悩んできた。シラバスの制約などもあるが、一番の問題は、伝統的な一斉授業に染まっている生徒が、いざ英語でタスクを与えられても戸惑ってしまうことであった。生徒の反応も鈍く、「受験に役立たない」という不満が上がったこともある。今回の「通じた」「自信がついた」という彼らの体験が、タスクに対する抵抗を克服するきっかけになれば幸いである。出川イングリッシュからもらった勇気、ハワイで感じたコミュニケーションの楽しさが、国内の 40 人学級に戻った後も、生徒たちの心に残ることを願ってやまない。

※註

Long (2015)は、学習者がどのような目的で言語を使うかというニーズ分析が TBLT には必須であると主張する。今回のミッションはこのような狭義の TBLT の要件は満たしていない。

参考文献

- Canale, M. & Swain, M. (1980). *Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing*, *Applied Linguistics*, 1, 1-47. Oxford University Press.
- Ellis, R. & Shintani, N. (2014). *Exploring Language Pedagogy through Second Language Acquisition Research*. Amsterdam The Netherlands: Routledge.
- 和泉伸一(2009)『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店。
- 門田修平(2007)『シャドーイングと音読の科学』コスモピア。
- Loewen, S. (2014). *Introduction to Instructed Second Language Acquisition*. Amsterdam The Netherlands: Routledge.
- Long, M.H. (2015). *Second Language Acquisition and Task-Based Language Teaching*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Schmidt, R. (1983). Interaction, acculturation, and the acquisition of communicative competence. In N. Wolfson & E. Judd (Eds.), *Sociolinguistics and Language Acquisition*, 137-174. Rowley, MA: Newbury House.

(獨協中学高等学校教諭)